

共同注意場面における養育者のかかわり —言語発達の足場づくりに注目して—

森下 葉子*

本研究では、7ヶ月から21ヶ月頃までの子どもと母親の共同注意場面における母親の言語的かかわりに注目し、その足場づくり機能について分析・考察した。親子の遊び場面の観察を行い収集した97事例から共同注意場面を抽出し、養育者のかかわりにより分類したところ、(1)注意の対象(物・人)の状況に関する発話、(2)子どもの動き・行為に関する発話、(3)子どもの発声・発話を真似る、応じる、(4)物の名称に関する発話、(5)子どもの発話に応じる、(6)他児の気持ちの代弁の6カテゴリーが生成され、共同注意場面において、母親が多様にかかわりながら、子どもに自らの意図や状況、モノの特性を伝え、子どもの言語発達を支えていることが示された。

Key words : 共同注意, 乳児, 言語発達, 養育者のかかわり

1. 問題の背景と目的

乳幼児にとって、養育者との関係性や環境のあり方はその成長・発達を支える重要なものである。乳幼児と養育者との間では、言語を伴わない「やりとり」が生後直後から繰り返し行われる。視線、表情、しぐさ、発声を通して行われるその豊かな「やりとり」は、やがて乳幼児が周囲の環境へ働きかける際の基盤となる。乳児は生後5か月を過ぎると養育者とのさまざまな対人的関わりを共有した経験を経て養育者から離れて対象物へと注意を転じ始める。またおすわり、はいはい、一人歩きなど移動行動の獲得に伴い、養育者を愛着の対象とし安全基地としながら自らの意思で周囲の環境に対する探索行動も行うようになる。養育者を始めとする身近な人との二項関係は9ヶ月を過ぎる頃に物や人を介した三項関係へと広がる。この頃から徐々に指差し行動も見られるよう

になる。1歳後半になると、自分が関心を向けたり発見したりしたものに対して行う叙述的指差しに対する他者の反応をもとに、他者とその場の経験を共有しているか否かを理解できるようになる(福山・明和, 2011)。三項関係の成立や叙述的指差し行動の出現は、自分とは異なる主体である他者の意図に気づき、相手の注意を引きつけたり、自分の注意を相手の注意の先に向けたりする、すなわち共同注意の成立を示す。こうした共同注意は言語発達の基盤となる。乳幼児が遊んでいるとき、養育者は視線や表情、発声、しぐさから子どもの心情を推し量り、周囲のヒトやモノと子どもをつなげ、それらとの相互作用を支える役割をもつ。こうした養育者のかかわりは、子どもに「ことばの機能、語意、統語的規則を発見しやすいよう(小椋, 2014)」な手がかり一足場作り—となり子どもの言語発達を支えている。一組の母子の家庭での相互作用を子どもが7ヶ月から1歳8ヶ月まで縦断的に観察した吉田(2011)は、いずれ

*人間学部児童発達学科

の月齢においても共同注意場面では子どもが母親の意図を理解していることを示唆している。また、子どもの身振りや役割交替、模倣行動などの言語的コミュニケーション行動に対して、母親は言語化、共感、支持、注意喚起、叙述的応答など実に多様な関わりをしており、そうした母親の関わりを通して、子どもは母親の意図をより明確に理解できるようになることを示した。また、石島・根ヶ山（2013）は、母子間で行われる「くすぐり遊び」の中で、モノこそ介さないものの、乳児が母親の意図を読み取り、くすぐり刺激源である母親の手に注意を向け、くすぐられる前から母親と「くすぐる—くすぐられる」体験を共有していることを示した。こうした身体を介したやり取りは二項関係から三項関係へ移行を促す働きをもつと考えられる。

本研究では、二項関係から三項関係への移行が見られ始める7ヶ月から言葉を介したやり取りがコミュニケーションの中心になる前の21ヶ月頃までの母子の共同注意場面での母親のかかわりに注目し、乳児の言語発達における母親の関わり場の足場作りとしての機能について考察する。

2. 方法

観察対象：A 大学内にある子育て支援施設を利用する0歳から18か月の子どもとその母親のべ148組の協力のもと、母子が遊ぶ場面を観察した。なお、利用者には当施設利用登録の際に調査への協力について了承を得ている。

観察場所：上記子育て支援施設を観察の場として利用した。当施設は、地域の0～3歳未満児とその保護者に対して開放されている。週に3日、9時半から14時半まで開所されており、その間の入退室は自由である。季節や天候によって左右されるが、1日の利用者数は10～30組である。スタッフが常駐しているが原則として保護者が子どもをみることになっている。施設内にはすべり台や昇降遊具、木製トンネル等の大型遊具のほか、布製・木製の遊具があり、利用者親子が自由に使うことができる。イベントやプログラムは提供さ

れていないため、保護者が子どもの様子をみながら思い思いに過ごす場となっている。本施設は、実験場面のように条件を統制された中での親子の姿ではなく、より自然な姿を観察することが可能な場である。

調査手続き期間：2012年6月から2014年7月にかけて観察を行なった。多様な場面での親子の姿を収集するため、観察場面は限定せず、親子が遊ぶ様子を約10～20分観察した。親子が観察途中で退室した場合は、そこまでを記録として残した。観察記録には観察シートを用い、子どもと母親それぞれの行為、発話（発声）を書き留め、観察終了直後に清書した。その場で観察用紙に記録し、観察終了後にエピソードにまとめた。

分析方法：期間内に採取した観察記録のうち、子どもの月齢が7～21ヶ月時の97事例から、母子の共同注意場面（母子が同じ玩具やモノ、人、事柄に同時に注意を向けている場面：74事例）を抽出し、母親の言語的かかわりに注目して考察した。

3. 結果と考察

観察により収集された事例を養育者のかかわりにより分類したところ、(1) 注意の対象（物・人）の状況に関する発話、(2) 子どもの動き・行為に関する発話、(3) 子どもの発声・発話を真似る、応じる、(4) 物の名称に関する発話、(5) 子どもの発話に応じる、(6) 他児の気持ちの代弁の6カテゴリーが生成された。以下、カテゴリーごとにエピソードをあげながら考察していく。

(1) 注意の対象（モノ・ヒト・コト）の特徴・状況に関する発話

子どもが視線を向けて興味・関心を示したモノや他者について、見えるものやその特徴など「見たまま」「ありのまま」を「○○だね」と言及するかかわりが見られた。こうしたかかわりは、子どもが何かに注意を向けているという行為そのものの受容を子どもに示している。

Ep.1) A 児 (7ヶ月)

A 児がガラス戸に顔を近づけ、室外にある通路を人が通っているのを見ている。母親は A 児の顔に自分の顔を近づけ、A 児を見ながら、「見えるねー」と声をかける。

Ep.2) B 児 (10ヶ月)

B 児が母親のネームホルダーに触ると、「うん、気になるねー」と言い、ネームホルダーを背中側に回した後、B 児を抱いて移動し、床に座らせる。近くにあった小さな車の玩具を口に入れる B 児。母親は口の中の車を白い車と交換し、「白だねー」と言う。B 児がスロープの玩具を触り、スロープ用の車を舐めると、スロープに車を転がす。カタカタと走る音に気付く。見る B 児。母親は「ねー 走ってるねー」と言う。(中略)母親の膝に座り、汗を拭いてもらいながら、他児が遊んでいる玩具をじっと見つめる。他児が使っている手押し車の音を聞き、キョロキョロ回りを見回す。母親は B 児の前で小さな車を走らせてみせる。車に気づき、近寄る B 児。母親は「車だねー」と言いながら、違う色の車を走らせる。B 児は他児の叩くハンマーの音に反応し、音のする方をじっと見る。母親は「なんだろうね、なんの音かなー」と B 児と同じ方向を見つめる。

(2) 子どもの動き・行為に関する発話

① 動き等に擬態語をつける

Ep.3-1 に示すように、子どもが玩具同士をたたき合わせる動きに擬音語をつける言葉かけは、この事例の他にも子どもが鍵束の玩具を振るリズムに合わせて「シャンシャンシャン」と言うなど多く観察された。また、滑り台を降りるときに「するするするー」と言ったりする等、子どもの動きに擬態語をつける発話も見られた。こうした言葉かけは、子どもの行為を承認し楽しい雰囲気を共有することにつながり、子どもの注意を持続させるのではないだろうか。

Ep.3-1) C 児 (11ヶ月)

C 児は箱から取り出したカブラを両手に持ち、カブラ同士をぶつけて音を鳴らす。母親は音に合わせて「トーン」と言う。C 児がカブラを鏡に当てて音を出すと、それに合わせて「ドーン」と言う。

② 注意の対象に対する行為を意味づける

次の Ep.3-2 は Ep.3-1 に続く事例である。前半

は、子どもが「はい」とカブラを渡すと「はい」と受けとっているが、後半、「あー」と言いながらカブラを母親に手渡そうとすると、母親は受け取りながら「ちよーだい、ありがとう」と応じている。既に渡そうと行為で示している子どもに「ちよーだい」と要求を示してから「ありがとう」と受け取っている点が興味深い。母親は、子どもの「渡す」という行為を「相手から『ちよーだい』要求されて渡す」という一般的な一連の流れに組み込みたかったのだろうか。Ep.4 は、仕切板から顔を出したり引っ込めたりしている子どもの行為を「いないいないばあ」という遊びに意味づけ、そのあとの遊びにつながっている。また、子どもの玩具を撫でる子どもの行為に合わせて「いいこ、いいこだね」のように解説を加え、行為に意味づける発話が見られた (Ep.5)。Ep.6 はモノを受け取る一渡すの役割交替が母子間で行われている事例だが、母親は、子どもから受け取った玩具を「まんま」と見立てて子どもに返している。これにより、単なる玩具を渡す一受け取るというやりとりが、ご飯をあげる—もらうという見立て遊びになった。いずれの事例においても、注意の対象に対する子どもの行為を母親が意味のある行為として子どもに返しており、意味づけされたそれらの行為はその後繰り返されていた。こうしたかわりにより、子どもは自らの行為と言葉、また行為の意味を関連づけていく。また、渡す—受け取る、隠れる—見つける、なでる—なでられる等の役割交替を含むやりとりを繰り返すことは、その後の言葉でのコミュニケーションの基礎となっている。

Ep.3-2) C 児 (11ヶ月)

母親がカブラを積み上げているのをしばらく見た後、カブラの箱を支えにしてつかまり立ちをし、箱からカブラを取り出すと「はい」と母親に渡す。母親は「はい」と受けとると、「わー」と声を出して笑う。子どもの笑う姿を見て母親も「わー」と一緒に笑う。母親が積み上げたカブラを子どもが倒し、それを母親が拾いながら片付け始めると、子どももカブラを拾い、「あー」と母親に渡そうとする。母親は「ちよーだい、ありがとう」と受けとる。

Ep.4) D児（11か月）

D児が仕切板の後ろに立って、頭を出したり、しゃがんで隠れたりという行為を繰り返したところ、母親が反対側から「ばあ」と言ってD児の真似をして顔を出した。母親が仕切板の穴からD児に向かって指を出し入れすると、D児はその指を追視し、捕まえようと手を伸ばす。さらに、指を出し入れしながら仕切板の影から顔を「いないいないばあ!」と出す母親の「ばあ!」にあわせて笑うD児の姿が見られた。その後、D児は母親がいる側に回り込み、母親の真似をして穴に手を出し入れした。

Ep.5) E児（12ヶ月）

手押し車を押しながら室内を歩くE児。母親はE児についていく。E児は途中で立ち止まり、回りを見たあと、手押し車の犬をなでる。母親は「いいこ、いいこ、だね」と言う。近くに来たF児をみる。母親はF児の母親と話し始める。F児がE児の頭をなでた後、ぬいぐるみをE児の前にもってくるとE児はそのぬいぐるみの頭をなでる。

Ep.6) G児（18か月）

プラスチックの玩具をつかみ損ね、しゃがんで拾うと、プール横のベンチに座っている母親の元へ行き玩具を渡す。母親は「ありがとう」と受けとると「まんま、どうぞ」とG児に玩具を返す。「まんま」と言い玩具を受けとるG児。「まんま」と繰り返し、玩具を母親に渡す。

- ③ 動きや行為に込められた子どもの気持ちを言語化する

Ep.7) H児（9ヶ月）

ハイハイで合わせ鏡のトンネルまで行き、鏡を覗き込む。母親も反対側から一緒に鏡を覗く。突然泣き出したH児に対して、母親は「怖かったか、大丈夫、大丈夫」と笑いかける。H児が泣きながら母親の方にハイハイして近づくと「怖くないよー」と言いながらH児を抱き寄せ、トンネルから離れる。

三角形の合わせ鏡を覗き込むと、自分の顔がどの面にも無数に移る。H児はそれに驚き泣き出したのだろう。その気持ちを推測し、母親は「怖かったね」と言語化している。モノにかかわった時の子どもの表情や発声から子どもの気持ちを察し、「楽しいね」「嬉しいね」「痛かったね」など応じることは、その心情への受容や共感を示すとともに目に見えない感情に名前を付与することで

もある。

- ④ 子どもの様子から気持ちを推測し、応答する

Ep.8) I児（12ヶ月）

I児は手押し車から降りると、窓に近づき、外を眺める。母親も一緒に外を見て「外、風が吹いてるねー、外は出ないよ、だめだよ」と言う。

前半の「外、風が吹いてるねー」という発話は、(1)で示した子どもの注意の対象の特徴や状況に対する発話だが、後半の「外は出ないよ、だめだよ」は窓の外を眺める子どもの様子から「外に出たい」という気持ちを推測している。そしてその気持ちを言語化せず、「出ないよ、だめだよ」と応じている。

- (3) 子どもの発声・発話を真似る、応じる

子どもの発する喃語や一語文を真似て、応答する姿は1歳前後から見られた。Ep.9, 10は有意味語を話す前の発声に母親が真似て応じている事例である。身体を揺らしたり、歩行したりしながら、身体の動きに合わせて発声する姿は0歳代後期によく見られる。意図的・無意図的に関わらず、養育者はそこに意図を見出して真似するなどして応じる。また、この頃、一語文での発話も見られるようになる（Ep.11, 12）。一語文で表現された子どもの要求を読み取り応じる母親の姿が見られた。Ep.11は、子どもの「ブーブー」という発話に「ブーブーだね」と同じ言葉を繰り返すことで応じている。また、Ep.12では、子どもの「いっしょ!」の発話に「一緒にやろう」の意味を読み取り、行為で応じている。自らが発した言葉に応答してもらうことは、他者に理解されたことの実感につながるだろう。

Ep.9) J児（12ヶ月）

滑り台を這い上がろうとする。母親も同じように「よいしょ、よいしょ」と上り、「ママできたよ」と言う。母親の動きをよく見て真似をして上りきると「上手だね」と褒めてもらう。滑り台を降りて、ハイハイで床を移動しながら「パッパッ」と声を出す。母親は「バ

「バ?ん?な~に?」と発声を繰り返して、子どもの表情を見る。

Ep.10) K 児 (13 ヶ月)

K 児が合わせ鏡を覗き込み、(鏡に映った自分の顔を見たのか)「バツ」と声を発すると、母親も K 児の真似をして「バツ」と言う。

Ep.11) L 児 (14 ヶ月)

木製の車の玩具で遊んでいる。母親は隣で見守っている。子どもが「ブーブー」というと「ブーブーだね」と応じる。

Ep.12) M 児 (19 ヶ月)

押すとクルクル回る玩具を押して歩いていた M 児。自分と同じ玩具を指差して母親に「いっしょ!」と言う。母親は同じ玩具を持ち、押しながら M 児についていく。

(4) 物の名称に関する発話

1 歳代の後半になると語彙の爆発期と言われるほどに語彙数が増え、モノ・コトと言葉が結びついていく。Ep.13, 14 に示すように、共同注意場面においても、養育者は言葉に出会わせるかのように、互いに注意を向けているモノの名称を意図的に子どもに質問したり提示したりしていた。

Ep.13) N 児 (19 ヶ月)

母親がお絵かきマットを L 児の前に置くと、スタンプを押していく。母親は「ちよんちよんって書くの」とスタンプを押してみせる。それを見て N 児は母親の真似をしてポンポンとスタンプを押す。「そうそうそう」と母親。スタンプを何度か押すと、近くの棚にしまっている井形ブロックを手にする。母親は丸のスタンプを N 児に見せながら「N ちゃん、これ何?四角?」と声をかける。母親のところへ戻り、スタンプを押してみても「まる」と答える。別のスタンプを見せて「これは?四角、三角」と N 児にスタンプを見せる。母親を見ているが手元のスタンプを押して「まる!できた!」という。「できた!」と答えると、持っているスタンプを「早く早く!」と言いながら早く押す。N 児も母親の真似をしてスタンプを早く押していく。

Ep.14) O 児 (21 ヶ月)

O 児は、玩具のお弁当箱からおにぎりやハンバークを出し、食べるふりをした後、再びお弁当箱に食べ物詰めていく。母親は側で「ハンバーグ」等食べ物の

名前を伝えながらいっしょに詰めていく。

(5) 他児の気持ちの代弁

他児へ関心を向け、かかわろうとする子どもの気持ちや相手の気持ちを代弁し、子ども同士のかかわりを仲介する姿が見られた。他児がしていることへの興味・関心は 0 歳代から追視や注視等で見られるが、Ep.15 に示すような、他児の気持ちを代弁するかかわりは、子どもの他児への接近・接触が多くなる 1 歳以降に多く見られた。Ep.15 の母親は子どもの気持ちを「Q 君にもどうぞ」と他児に代弁したり、他児の気持ちを「Q 君が貸してだって」と代弁して伝えたりしている。相手の意図や気持ちに視点が向かない、理解できない時期に、このように他児とのかかわりを介入し調整する他者の存在は重要である。

Ep.15) P 児 (15 ヶ月)

水遊び場で容器に水を入れて母親に渡すと、母親は「ありがとう」と飲むふりをする。P 児は隣に来た Q 児にも水を入れた容器を渡す。母親は「Q 君にもどうぞ」と P 児が手渡すタイミングで Q 児に伝える。(中略) 容器に水を入れて出す行為を繰り返していると、Q 児が来て P 児のもっていた容器を取る。母親は「Q 君が貸してだって」と P 児に伝える。

4. 総合考察

本研究では、これまでに実験場面や家庭場面での観察から検討されてきた養育者と子どもの相互作用について、子育て支援施設内という限られた場ではあるが複数の親子が同時にいてそれぞれが自由に、時にかかわり合いながら遊んでいる場での観察を試み、日常的な親子の相互作用について、特に母親の言語的にかかわりに注目して事例を見てきた。共同注意場面において、子どもの興味・関心に気づいた母親は、発話や行為など多様なかかわりで応じていた。吉田 (2013) において、7 ヶ月頃から子どもが母親の意図を理解しており、母親の応答的なかかわりによってその意図理解がより深まることが示されている。本研究でも、特に Ep.3-2, 4, 5, 6 のようにモノを介したやりとりが繰

り返されたり遊びに発展する場面で、子どもが母親の意図を理解している様子がうかがえた。

また、本研究では、直接的にモノの名称を子どもに示したり質問して確認したりするかかわりも見られた（Ep.13, 14）が、一方で、同じ玩具に注意を向けている場面で、母親が「見たまま」「ありのまま」に言及するかかわりや、自分の動作に言葉を合わせているかかわりも見られた（例：Ep.13「早い早い！」と言いながらスタンプを押す手を早める／Ep.9「よいしょよいしょ」と言いながら滑り台を上る）。これらのかかわりが見られた背景には、子育て支援施設という観察環境による部分が大きいと考える。家庭にはない玩具や遊具など新奇なモノや珍しいモノに注意を向ける機会が多くあり、母子間のやりとりや遊びを豊かにした。こうした場面での言語的かかわりが、言葉とモノ・コトをつなげ、意味を付随し、言葉との出会いを保証しているのではないだろうか。

また、幼稚園や保育所の3歳児学年の保育者においても子ども同士のやりとりに介入し互いの思いを代弁する姿は見られるが、就園前の家庭での養育においても同様の姿が養育者に見られた。乳児期の母親の敏感性と幼児期時点での子どもの友人関係スキルとの関連について検討した研究では、乳児期時点での母親の敏感性が低くても、幼児前期までに他児との交流の機会が多い場合は、5歳時点で他者に対して感情表出の制御ができるが、母親の敏感性が低く、幼児前期までに他児との接触が少ない場合、他者に対しての感情表出の制御がしにくいことが明らかにされている（福田，2008）。ベネッセ教育総合研究所（2016）の調査によれば、平日の遊び相手を母親とする未就園児は約9割で20年前の5割から大幅に増えているのに対し、友達と回答したのは3割弱で20年前から半減している。これらのことから幼稚園就園前親子が他の親子とかかわるような場の提供は今後も求められるし、その中での日常的に行われている言語的かかわりが子どもの言語発達の足場づくりとして機能していることを母親をはじめとする養育者に伝えていくことも重要なのではないだろうか。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所（2016）. 第5回幼児の生活アンケート, http://berd.benesse.jp/up_images/research/YOJI_all_P01_65.pdf(閲覧日: 2017/9/20).
- 福田佳織（2008）. 幼児の友人関係スキルに及ぼす母親の敏感性と友人接触経験の相互作用, 教育心理学会第50回総会.
- 福山寛志・明和政子（2011）. 1歳児における叙述の指さしと他者との共有経験理解との関連, 発達心理学研究, 22, 140-148.
- 石島このみ・根ヶ山光一（2013）. 乳児と母親のくすぐり遊びにおける相互作用: 文脈の共有を通じた意図の読み取り, 発達心理学研究, 24, 326-336.
- 小椋たみ子（2014）. 前言語期から文法出現期の子どもへの養育者のことばと身振りでの働きかけ, 帝塚山大学現代生活学部紀要, 10, 109-121.
- 吉田直子（2011）. “共同注意”の発達の変化 その3—言語獲得期の相互作用に関する質的検討—, 現代教育学部紀要, 3, 43-54.

付記

本研究は、平成24年～26年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究 課題番号24653235 研究代表者：椛島香代）による研究成果の一部である。なお、日本保育学会第70回大会において発表したものを再分析し、論文とした。

（2017.9.27 受稿, 2017.10.17 受理）